

副用語の歴史的研究の現在

川瀬卓（白百合女子大学）
林禎映（全南大学）
川村祐斗（愛知淑徳大学）
川島拓馬（富山大学）

全体趣旨

本パネルセッションは、「副詞」「接続詞」「感動詞」といった、いわゆる副用語に注目し、文法変化を考えるうえで副用語がもたらす知見とその可能性について示すことを目的とする。

副詞、接続詞、感動詞は、自立的な語でありながら、語彙的・内容的な意味を表すものではなく、文法的・機能的な意味を表す一群（小柳（2018）の言う「自立的機能語」）である。副用語（副用言）というカテゴリーは、文の骨組みとなる自用語（体言・用言）に対して、文の骨組みにならない副次的依存的な類として設定されたものであるが（工藤 2000）、副用語を自立的機能語と捉えた場合、助詞や文末の文法形式を見るのとは、また異なった様々な文法問題が立ち上がってくる。渡辺実が「いわゆる副用語の扱いに成功しない限り、構文論も意義論も、やり易い所だけを論じているにすぎない（中略）いつかは副用語の問題と対決しないと、構文論も意義論も完いものとは言えない」（渡辺（編）1983：475）と述べるように、研究上の困難さはあるが、その重要性は言を俟たない。本パネルセッションでは、歴史的研究の立場から、副用語にとりくむことが日本語文法研究にどのような実りをもたらすのかを考えたい。

各発表の概要

川瀬発表「**文法史研究としての副詞研究**」では、語構成的側面への注目、連体修飾構造という統語的環境への注目、感動詞化における語用論的要因への注目という3つの観点を取りあげ、文法変化の問題を考えるうえで副詞が様々な知見をもたらすものであることを示す。林発表「**評価を表す陳述副詞の史的展開**」では、評価を表す陳述副詞へと変化した事例を複数とりあげ、その史的展開に見られる意味変化、形態・統語変化の諸相を示す。川村発表「**接続詞における対人的意味の獲得—サレバを事例として—**」では、いわゆる接続詞が対人的意味を獲得する変化の事例としてサレバを取り上げ、本文種別と発話における出現位置に注目して、歴史の変遷を記述する。川島発表「**近代語における接続詞の成立と多様な展開**」では、近代語における接続詞の多様なあり方を捉えることを目的に、新たな接続詞の成立、および文章ジャンルによる使用傾向に関わる論点を提示する。

これらの発表を通して多様な論点を提示するとともに、副詞、接続詞、感動詞に関する歴史的研究、ひいては日本語文法史研究のさらなる活発化に資するような議論を会場の方々で行いたい。